

奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究Ⅲ： 背面銘文刻と成立過程及びその後の影響について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 裕之, 漆原, 徹, 遠藤, 祐介 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1327

奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究Ⅲ

―背面銘文刻と成立過程及びその後の影響について―

A Study of bussokuseki(stone imprint of Buddha's feet), a National Treasure at
Yakushi Temple in Nara Ⅲ :

On Process of the Completing Back of Bussokuseki
and its Subsequent Effects

廣瀬裕之*

HIROSE Hiroyuki

漆原徹†

URUSHIHARA Toru

遠藤祐介††

ENDO Yusuke

1. はじめに

本研究は、「中国仏教の日本への受容」をテーマとして「しあわせ研究」の調査を続行する中で、初期仏教をまさに象徴するものといえる日本最古の天平勝宝五（七五三）年刻の薬師寺にある「佛足石」に刻された銘文の書とその背景について注目し、書道学（廣瀬）・歴史学（漆原）・仏教学（遠藤）から論考したもので、すでに発表した次の二つの共同研究を承けるものである。

- ①「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究―正面銘文として刻された書―」『武蔵野教育学論集』第四号所収（二〇一八年三月）
- ②「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究Ⅱ―左側面銘文刻とその成立過程―」『武蔵野教育学論集』第六号所収（二〇一九年三月）

上記の論文で発表した佛足石正面と左側面銘文に関する研究に続き、本稿では背面に刻された銘文の分析を進める。最初に銘文の本文、書き下し文、現代語訳、注釈を提示し、これを手掛かりとして薬師寺佛足石に関わった人々の信仰のあり方や成立過程を前号に引き続き考察することとした。

また、奈良時代以後、江戸時代に佛足石がまた盛んに造られるようになるのだが、その間の期間（中世など）における佛足石の存在を埋める研究がほとんどなされていないことが判った。そこで、私たちは今回大阪と和歌山に古くから存在する佛足石の調査をあわせて行い、その成果の一端を収めることができたのでここに記すこととした。

二、佛足石背面銘文の釈文

佛足石の銘文についての主な先行文献として次の論文がある。冒頭の太字は、それぞれの文献の略号として示した。

- ① 旧↓薬師寺発行の解説パンフレット（出典は『奈良六大寺大観 第六卷 薬師寺全』としている）
- ② 新↓『奈良六大寺大観 第六卷 薬師寺全』補訂版（岩波書店、二〇〇〇年）
- ③ 吉↓吉村怜『天人誕生図の研究』（東方書店、一九九九年）
本書所収の神直石手論文の初出は吉村怜「薬師寺仏足石記と書者「神直石手」について」（『美術史研究』八、一九七一年）
- ④ 岡↓廣岡義隆「佛足石記佛足跡歌碑本文影復元」（『三重大学日本語学文学』一、一九九〇年）、『佛足石記佛足跡歌碑歌研究』（和泉書院、二〇一五年）

これらの先行研究を基にしつつ更に飛鳥園撮影の写真〔注*〕及び精拓本（埵和本）によって考証を加えたものが次の太字の釈文である。先行研究の中で異なる文字に棒線を記し、その左側に、先賢の諸説を記した。

〔注*〕写真 令和元年9月25日付で薬師寺に掲載許可申請、同年10月1日付・薬師寺掲載許可第1―268号により、飛鳥園から提供していただいたもの

（銘文の行数と釈文）

- | | |
|--|---|
| <p>1 至心發願爲
・旧新吉…爲 岡…為</p> <p>2 亡夫人從四位下
・旧新吉…從 岡…從</p> <p>3 茨田郡主法
名良式敬寫</p> <p>4 釋迦如來神
・旧…釈 新吉岡…釋
・旧広…來 新吉…來
*五字目は、へんの字形が「神」「神」にもどちらにも見える字形をしている。</p> <p>5 跡伏願夫人
之靈駕遊入
・旧岡…靈 新吉…靈
・岡…「遊」のあとに「入」
*今回の調査でも精密な写真画像と拓本を過眼するとわずかに残る刻跡より「入」が存在するように見える。これについては第三節13で詳しく述べたい。</p> <p>6 无勝之妙邦
受□□□□之</p> <p>7 聖□永脱有
・旧新…□□□□ 吉…□□ 岡…□□□□
・旧新吉…□□は言ベン 岡…□□</p> | <p>1 至心發願爲</p> <p>2 亡夫人從四位下</p> <p>3 茨田郡主法</p> <p>4 名良式敬寫</p> <p>5 釋迦如來神</p> <p>6 跡伏願夫人</p> <p>7 之靈駕遊入</p> <p>8 无勝之妙邦</p> <p>9 受□□□□之</p> <p>10 聖□永脱有</p> |
|--|---|

▼写真1 薬師寺佛足石・背面銘文刻(原刻) [飛鳥園撮影]



*二字目の□は、飛鳥園撮影写真でも埴和本精拓本でも「言べん」は過眼できる。しかし旁部及び9行目の中央部にかけては剥離による摩滅により不明。

11 漏高證无爲同

12 霑三界共契一眞

・ 旧新吉・眞 岡・眞

(書き下し文)

至心ししんに発願ほつがんし、亡夫人じゆしいのけまん従四位下茨田郡主ほうみやう法名良式の為に、敬つしんで
釈迦如来の神跡を写す。

伏して願ねがわくは、夫人の靈、駕遊して無勝の妙邦に入りて、□□□
□の聖□を受け、永とこしえに有漏うろうろを脱だつし、無為むゐを高証たかしんし、同どうに三界さんがいを霑うるおし、
共に一眞いつしんに契あわんことを。

(現代語訳)

真心を持って誓願を立て、今は亡き夫人の従四位下茨田郡主、法名は良式のために、慎み敬って釈尊の足跡を写す。

仏に平伏し礼拝し、夫人の靈がこの上なく素晴らしい仏の国にて悠々ゆうゆうとし、□□□□の聖□を受け、永遠に煩惱からときはなたれ、悟りの境地に至り、迷いの世界の生きとし生くる者すべてに利益りやくがおよび、皆共に仏が教える真理に目覚めることをお願い申し上げたい。

三、原刻写真と精拓本の比較による刻された書線の検討

薬師寺佛足石側面の銘文は、どの面も概ね風化により摩滅している

るが、背面は、正面刻や右側面刻と比べると、剥落部分があるとはいえ、刻線は比較的明瞭な方である。正面・左右の側面は、肉眼で観察することができる。しかし現在、佛足石の背面が、堂内の壁面とほぼ接するに近い状態で安置されている。そのため刻線を肉眼で直接確かめながら見ることはできない。

ゆえに、今回の背面銘文調査及び復元にあたっても前回の研究と同様に新倉埵斎・金木和子両氏が昭和四十七年に採拓した精拓本（埵和本）を頼りに、復元作業を進めると同時に、かつて佛足石移動時に飛鳥園によって撮影された貴重な背面の現刻写真画像とも比較検討しながら（表1参照）進めることとした。更に強く影響を受けていると思われる北魏時代の書の古典を参照して導き出したものが表1の下部に示した一次補正・二次補正である。

佛足石背面の銘文の周囲に刻されている枠（方格）の寸法は横巾66cm、縦の寸法については最も長い右側が28・5cm、中央部の狭い箇所が25cmである。文字の大きさは、最も大きい「釋」字は、横4cm、縦5cmであり、小さい文字は2cm角である。

ちなみに佛足石の右側面に唯一刻された銘文（本稿第4節末尾の写真2）の大きさ（枠「方格」の寸法）は、上部の横が12cm、下部の横が11・5cm、縦が18cmであることを合わせて記しておく。

- 1、至・拓本（原拓）では、二画目の横画の位置が刻線と傷により二通り推定でき、特定に困ったが、原刻写真画像により正しい位置が判定できた。同様に最終画の起筆と収筆の位置と太さについても写真により判定できた。

- 2、心・原刻写真によって一画目の点の位置が特定できた。三・四画目の点の位置は、原刻の摩滅が著しく拓本及び写真においても特定が困難。推定位置を二次補正で示した。

- 3、發・上部の「はつがしら」が、珍しい字形である。原刻写真により、より明確となる。

- 4、亡・一画目の字形と三画目の収筆の状態が拓本では特定できなかったが、原刻写真により、刻線と石の傷との違いを読み取れて明らかにできた。

- 5、從・「從」の異体字について、隣の中央部の「点」の有無が気になったが、北魏の書にも点がある字例があり、原刻写真画像によっても点があることが判り、右下部が「之」になっていることが判明した。

- 6、式・異体字の「式」であるが、左下部は完全に「コ」の形となっている。

- 7、敬・原刻写真画像により、四画目及び五画目が明確となる。

- 8、寫・下部の四つの点の筆画の位置特定ができた。

- 9、釋・「米」に変化した「へん」の筆画の位置特定ができた。

- 10、神・「へん」の刻線が「ネ」にも「示」にも見える刻し方をしている。

- 11、伏・写真と拓本の両者に「犬」の三画目の起筆の方向の違いがみられることが興味深い。

▼表1 写真・拓本文字比較表

9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
5-1	4-5	4-4	4-3	2-4	2-1	1-3	1-2	1-1	行・位置
									原刻
									原拓
			式 <small>音字新基誌</small>	從 <small>弘法大師法苑珠林一巻 見陸基誌</small>	亡 <small>興瑞基誌</small>	發 <small>于基基誌</small>	心 <small>修運和 隆經智詩</small>		参照 古典
									1次補正 (廣瀬)

									2次補正 (廣瀬)
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--------------

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
12-3	11-3	10-4	10-3	9-1	8-5	7-5	7-3	6-2	5-5
界 <small>牛原通傳記</small>	證 <small>修序卷上</small>	脱 <small>大紀高遠傳記</small>	永 <small>修運和 隆經智詩</small>	受 <small>吳智基誌 元照基誌</small>	邦 <small>羅敬基誌 字元照基誌</small>	入 <small>修運和 隆經智詩</small>	駕 <small>元照基誌</small>	伏 <small>聯法成等清傳記</small>	

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

▼薬師寺佛足石・背面銘文として刻された書の復元

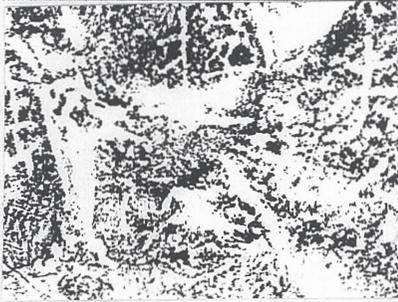




12、駕・・「馬」の下部が「四つ点」なのか「一」なのか拓本・
原刻写真とも不明瞭。

13、入・・写真画像・原拓本両方ともに浅い線で「入」字の筆画があるように見える。しかし、表2で示したように原拓を基に推定すると石本体の亀裂や傷なのか文字を刻した線なのかの判定がともしづらく、「入」の筆画らしき線状が、大きな「入」にみえる箇所(推定①)と小さな「入」にみえる箇所(推定②)の二種類がみられる。写真画像ではこれら二種類と別な位置に刻線らしき線状が見えるので、次の表に推定される三種類

▼表2 「入」字の刻線推定表

写真画像	原拓	推定案
		<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>③写真から I</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>①原拓から I</p>  </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <p>②原拓から II</p>  </div>

の字形をまず示しておくこととした。三種類の字形候補が出てきたので写真画像と原拓を更に入念に観察すると単なる平面ではなく凹凸のある複雑な表面のため特に斜めに走る山の稜線のような凸部では通常の採拓とは異なる墨だまりのような拓影が現出するようで、文字刻を再現する時には特に気をつけなければならぬことが判った。ゆえに③の字形に近いものと推定する。意味的には文章中のこの場所に「入」が挿入されたとしても通じるので問題はない。

- 14、邦・・左部の横画は四本ある。北魏の書にこの字例あり。
 15、受・・冠部の点が四つあるように見えるが、一つは傷である。
 16、永・・「永」字の右半分は、原石の剥落により完全に消滅。

二次補正で、北魏の鄭道昭の書より推定。

- 17、脱・・右上部は原石の剥落あり。
 18、證・・「はつがしら」の字形左側が「タ」
 19、界・・「界」の下部が「分」の異体字の字形となっている。

四、薬師寺佛足石成立の過程

先の論文において正面・左側面に関する研究を発表し、その中で仏跡図第一本の成立について考察した。本稿においては、背面に刻された仏足石銘文の本文、書き下し文、現代語訳から読み取った新たな内容を参照しつつ、①仏跡図第二本の成立、②仏跡図第三本の成立、③薬師寺仏足石の成立について考察を進め、④で仏跡図に関する小結を示し、⑤で正面・左側面主要部・背面以外の箇所に残された銘文を補遺として提示する。

①仏跡図第二本の成立

仏跡図第二本を唐の普光寺から平城京右京四条一坊の禅院にもたらした画師の黄文本実については、その活動年代が明らかではない。黄文本実が入唐した時期の上限は、王玄策が一回目の遣使の任務を終えて唐に帰国した可能性がある貞観十九年(六四五)、または二回目の貞観二十二年(六四八)ということになる。すなわち黄文本実が参加した可能性がある遣唐使の時期の上限は、白雉四年(六五三)

に派遣された第二回遣唐使とすることができる。なおこの第二回遣唐使には玄奘の直弟子となった道昭(六二九〜七〇〇)が参加しており、『続日本紀』巻一、文武天皇四年三月条には、道昭が経論を多数持ち帰ったことが記されている。これ以降、玄奘の新訳経典や教学が日本仏教に対して多大な影響力を発揮することになるのである。

次に黄文本実が日本に帰国した時期の下限について考察することとした。正倉院文書「写疏所解」(『大日本古文书』巻二、七一〇頁)に、禅院寺の天平一九年(七四七)十月九日の所蔵記録として仏跡図が見られる。天平一九年に直近の遣唐使の帰国は、玄昉らに参加した遣唐使である。『続日本紀』巻一六、天平一八年六月条によると、玄昉は天平七年(七三五)に帰国し、経論五千余巻と佛像を日本にもたらしたという。田村圓澄氏の研究¹⁾によると、

こうして玄昉は盛唐の最も新しい仏教である法相宗を智周に学び、「経論五千余巻及諸佛像」をたずさえ、天平七年(七三五)に帰国した。「経論五千余巻」は『開元釈教録』所収の一〇七六部五〇四八を指すと考えられる。つまり玄奘の翻訳にかかると、新訳経典をふくむ一切経が、はじめて日本に将来された。

というように、玄昉の帰国によって、玄奘の手になる新訳経典はほぼすべて日本に持ち込まれたと考えるとよさそうである。また玄昉によって玄奘の弟子の基が創始した法相宗の教えも日本に伝えられた。

黄文本実の活動年代については具体的な年代を特定することはできないが、これまで考察したことから言えるのは、日本仏教に対する玄奘の影響が強まっていた時期だということである。黄文本実

は仏教を専門とする僧侶ではなく画師ではあるが、遣唐使としての教養を備えた知識人であり、仏教に関しても一定の知識を有していた人物だったと想定される。

黄文本実が長安の普光寺で仏跡図に出会った際に、これを日本に持ち帰ろうと考えた動機はもちろん崇拜の対象としてふさわしいものだと判断したからである。崇拜に値すると判断した根拠となるのは、薬師寺仏足石正面の銘文に記される仏跡図の由来、すなわち玄奘の『大唐西域記』と『観仏三昧海経』の記述内容だったのでないだろうか。玄奘の言と仏説の經典という価値の裏付けがあるからこそ、黄文本実はこの模写して日本に持ち帰ったのだと考えられる。

「写疏所解」は禅院寺の仏跡図について「仏跡図一卷」と記し、その下に「二条紅帛 一条 [] 一条錦帛」と記載している。帛は袋の意味なので三袋分、つまり仏跡図は三枚存在し、それぞれ袋に入れて大事に保管されていた可能性がある。黄文本実が唐にいるときに三枚模写したか、または日本に帰国してから追加して描いた可能性もある。

これに続いて、黄文本実が仏跡図を禅院寺に納めたことの意味について考察を試みたい。平城京の右京にあった元興寺の禅院の前身は、玄奘に学んだ道昭が帰国後に住んだ飛鳥寺（元興寺）の禅院である。『統日本紀』巻一、文武天皇四年三月条に記される道昭の伝記に、禅院について次のように記されている。

初め孝徳天皇の白雉四年、使に随いて入唐す。適玄奘三蔵に遇い、師として業を受く。三蔵特に愛し、同房に住せしむ。

…中略…

元興寺東南隅に於いて、別に禅院を建てて焉に住す。時に天下行業の徒は、和尚に従いて禅を学べり。…中略…後に平城に遷都するや、和尚の弟及び弟子等は奏聞し、禅院を新京に徙し建て。今の平城右京禅院が是れなり。此の院多く経論有り。書迹楷好。並びに錯誤せず。皆和上の将来せる所の者なり。

石田茂作氏の研究³⁾では、「写疏所解」に記される禅院寺を平城京に移された元興寺の禅院であると推定しているが、石田氏は薬師寺仏足石銘文に記される右京四条一坊の禅院には言及していない。藤野道生氏は、

かの“本元興寺”東南隅から移し建てられたと伝へる“道昭禅院”をもつて、これに擬してみると、その場所は、同じく

“右京”であつたといふし、また、道昭将来の幾多の經典を所蔵していたといはれる如き、この建物の有つ特殊性格からしても、遣唐使節が、唐にあつて写し帰つたと見える“仏跡図”を収蔵するの場所として、極めて自然に感ぜられるのである。

と述べ、薬師寺仏足石銘文に記される右京四条一坊の禅院とは元興寺の禅院のことであると解している。藤野氏のこの推論は次に挙げる発掘調査を基にした研究成果によって、正当性はほぼ証明されたと言えるだろう。奈良市埋蔵文化財研究センターの研究によると、

1992年の飛鳥寺東南部の調査で、複弁八弁蓮華紋軒丸瓦・重弧紋軒平瓦、竹状模骨丸瓦が出土し、東南禅院と推定されていた。東南禅院は道昭が7世紀後半に建て、平城遷都にともない右京四条一坊に移建され、禅院寺となったことが知られる。

右京三条一坊十四坪からの出土瓦は、飛鳥の東南禅院から運ん

禪那を略したものであり、瞑想して身心を統一することで、定の一
分と解する。しばしば総合して禪定と言う。

薬師寺仏足石正面の銘文に、『観仏三昧海経』からの引用として
「釈尊が世を去った後に、釈尊の歩みを観想する人々もまた同様の
罪業を消すことができる。また釈尊の歩みを観想しなくても、釈尊
の足跡を見たり、仏像が行く姿を見たりした人々もまた同様に罪業
を消すことができる」と記されており、専門家である僧侶は観想を
すればよいし、専門家ではない在家の人々は観想しなくても、仏足
石を見ればこれまでの罪業を消すことができると説いている。この
ような観仏三昧と仏跡図をセットにした理解は、仮に玄奘が作り出
したものではなかったとしても、唐において成立したと考えるのが
妥当であり、この仏跡図に対する信仰は玄奘に対する尊崇や敬慕の
念と混ざり合いながら、黄文本実によって日本に伝えられたと考え
てよいのではなからうか。

② 仏跡図第三本の成立

記録がないために、第三本の作者と所在を明らかにすることがで
きない。薬師寺仏足石左側面の銘文に登場する越田安方が禪院寺に
ある第二本を模写して第三本を作り、その上さらに仏足石作成の素
材となる下絵を作ったことも想定できるし、どこかの寺院に納めら
れた第三本を基にして越田安方が仏足石作成のための下絵を作った
ことも想定できる。いずれにしろ、第三本については詳細不明と言
わざるを得ない。

③ 薬師寺仏足石の成立

第二本の成立を論じた際に、薬師寺仏足石正面の銘文に『観仏三
昧海経』を引用し、僧侶は観想をして三昧に入ればよいし、在家の
人々は専門的な観想をしなくても、仏足石を見ればこれまでの罪業
を消すことができると説かれている点に言及した。『観仏三昧海経』
は専門家向けと専門ではない人向けの救済方法を提示している経典
であると言える。玄奘が道昭に禪定を勧めたことから読み取れる
ように、仏教は論理的に教学を深めて悟りを求める面とともに、仏
の教えは人智を超えた深さがあるゆえに禪定によって、または仏の
力に頼って涅槃の境地に至ろうとする面がある。文室真人智努とい
う人物はどのような考えがあつて、薬師寺仏足石の作成を発願した
のであろうか。

智努は天武天皇の孫で、『続日本紀』卷二三に、天平宝字五年
(七六一)に法名の「浄三」という名で登場している。廣岡義隆氏
の研究によると、その前年に光明皇后が崩じた際には「智努」の名
で出ているので、天平宝字四年六月以降に出家したことを想定して
いる。仏足石を作ったのは、出家する前の天平勝宝五年(七五三)の
ことであるが、智努はこの時点ですでに仏教に対する深い造詣を有
していた人物であつたと考えてよいであろう。

智努は仏教が必須の教養となつていた時代の知識人として、玄奘
訳の経論に基づく法相宗の唯識思想という高度な仏教思想を学んだ
可能性も考えられる。しかし、仏足石から読み取れる信仰は難解な
ものではなく、比較的シンプルな仏教的世界観に基づく信仰である。
智努は知識人として高い学識を有するとともに、理詰めで考えて悟
りを追求するのではなく、妻が素晴らしい仏の国で安楽な境地に至
ることや、生きとし生けるものが幸福になるという理想を求めると

いう一面を有していたことが観察される。

④ 仏跡図に関する小結

本稿では薬師寺仏足石信仰の由来と成立過程について、玄奘との関わりに留意しながら考察を進めてきた。第一本仏跡図は王玄策がマガダ国から唐に持って来たものであるが、これは普光寺という勅願寺に納められており、尊重されたものと考えられる。仏跡図が尊重された理由は、マガダ国からもたらされた珍しい文物であるというだけではなく、玄奘による価値の保証が大きい役割を果たしたのではないかと想定される。

第二本は黄文本実が日本にもたらしたものだが、これは玄奘の直弟子道昭が住した寺院である禅院寺に納められた。第一に仏跡図が玄奘によってその価値が保証されていること、第二に仏跡図を見ることで人々が救われるという信仰が観仏三昧という禅定を説く経典を典拠としていること、この二点が禅院寺に第二本が納められた有力な原因となったのではなからうか。

第三本が成立した経緯についてはほぼ解明できない。第三本に基づくと見られる薬師寺仏足石は文室真人智努の発願によって作られたものであるが、彼の信仰形態と奈良を代表する大寺である薬師寺の信仰形態がほどよく合致していたことから、仏足石をまつる場として薬師寺が選ばれたのではないかと思われる。その信仰形態の特徴とは、知識人を満足させる高度な思想が信仰の背景にあることと、比較的簡単に誰もが仏の世界に至れるという方法を提示している信仰であることの二点にまとめられる。薬師寺は唯識学など玄奘の新訳の経論に基づく教えを伝える場所であり、これと同時に仏足石を

安置しておまつりできた場所でもあることで、奈良時代における知識人の信仰の拠り所になったのだと考えられる。

⑤ 補遺

ここでは正面・左側面主要部・背面以外の箇所銘文を補遺として提示する。

【左側面第十行方格外下方】

(本文) 三國真人淨足

(書き下し文) 三國真人淨足

(現代語訳) 三國真人淨足

【左側面向右下部】

(本文) 知識家口男女大小

(書き下し文) 知識の家口の男女大小

(現代語訳) 施主の家族の老若男女

【左側面方格外向右方】

(本文) 三國真人淨足

(書き下し文) 三國真人淨足

(現代語訳) 三國真人淨足

【右側面】

(本文) 諸行無常 諸法无我 涅槃寂靜

(書き下し文) 諸行は無常なり。諸法は無我なり。涅槃は寂靜なり。

(現代語訳) あらゆる現象は無常である。あらゆる存在に実体はない。

悟りの境地は安らかである。

▼写真2

薬師寺佛足石右側面銘文・刻面写真

〔飛鳥園撮影〕



五、佛足石の後世への影響 「大阪・和歌山調査報告」 林昌寺佛足石について

今年度（令和元年度）の共同研究調査では、古代薬師寺仏足石と近世仏足石の時代の空隙を埋める中世仏足石を求めて大阪府泉南地方の林昌寺、和歌山県紀三井寺、根来寺、粉河寺の各寺院を訪れ、境内に所在する仏足石の調査を行った。紀三井寺の仏足石は戦後に作成されたものであり、根来寺の仏足石は粉河寺のそれが誤って巷

間に存在が流布したもので存在しないことを確認したので除外し、林昌寺と粉河寺の仏足石について報告する。

今回おもな調査対象とした中世仏足石がある躑躅山林昌寺について、同寺所伝の由緒に従って紹介しておきたい。同寺は、有名な中世莊園九条家領和泉国日根野莊の南方に位置する地域にあり、山の南西斜面に寺の諸伽藍が建立されていて日当たりがとてよく、風光明媚な環境にある古い由緒を持つ寺院である。近隣地域には根来寺、粉河寺などの大寺院も点在し、高野山の麓にあるこれらの諸寺院との関係も林昌寺を考察する上で考慮する必要があるのではないかと思う。

林昌寺は聖武天皇の勅願寺としてその開基を行基とする古刹である。行基によって建立された三院六坊からなる当時の寺は、この地の水質が鉱質に富んでいたことから、温泉山菩提院岡寺と称されたという。現在とは異なる山号寺号であったことになる。近隣の大寺院である根来寺が、平安初期、粉河寺が聖武天皇没後の宝亀年間の開基であることから考えても、この地域では古い由緒を持つ寺院であるといえよう。同寺が現在の寺号山号となった契機について、由緒書きは次のように言う。「平安時代の後期、第七十三代堀河天皇が当山に行幸のみぎり、山つつじが見事であったところから、自ら山号を躑躅山とし、法林繁盛の勝地となるよう、寺号を林昌寺と改められた。」

平安時代は熊野詣をはじめ天皇の行幸は珍しくなかったので、都から和歌山を経て熊野へ向かう途中立ち寄ることも不自然ではないし、林昌寺を目的地として行幸があった可能性もあるだろう。天正

▼写真3・4

林昌寺佛足石



年間には、織豊政権によって、天正五(一五七七)年の信長による雑賀

攻め、同九(一五八一)年の高野攻め、同

十三(一五八五)年の秀吉の紀州征

伐が継続的に行われており、泉南か

ら紀州の諸寺院は大きな被害を受けている。このため

、林昌寺も創建当時からの堂塔伽藍は灰塵に帰し、現

存の諸堂伽藍は、江戸初期から中期にかけて建立され

たものを始めとして近年に再建された堂塔もある。現

在の林昌寺は、京都の仁和寺を本山

とする真言宗御室派に属し、別名を岡大師と称するように泉州地区の弘法大師信仰の中心となっている。和泉国三十一番札所として近世にも栄えた寺院として今日に至っている。

林昌寺仏足石は写真3・4に見られるように、右側面上下の二か所と左側上部一か所の計三か所に切り欠き部分がある。この切り欠き部分には写真画像からでは読み取ることができないが、線刻された仏像の輪郭が残されている。右側上部と左側部分の線刻は風化が進みかろうじて線刻が看取できるものの明瞭ではないが、左側手前下部の切り欠き部分には比較的明瞭に線刻された小仏を判別することができる。なお背後に直立する青石に刻まれている文字は「仏足跡」と記されているが近世のものである。この切り欠き部分に線刻の仏像が見られるのは、すでに本研究Ⅱで存在を明らかにした京都法然院の仏足石(写真5・6)と安土城仏足石(写真7・8)の二つの中世仏足石と共通する特徴と見ることができよう。初伝の通り林昌寺仏足石は、中世の仏足石であるとして誤りないと思われる。台石の側面に切り欠き部分がありそこに線刻の小仏が描かれているという特徴は、多くの近世・近現代仏足石には全く見られないので、中世仏足石の識別点としてよいだろう。次に台石上面に刻まれている仏足本体そのものが、技巧的な近世の仏足石と比較すると、明らかに単純素朴で雅味があるといえる印象を受ける。林昌寺仏足石の石質は玄武岩のように見え受けられるが、苔や泥の付着により明確にはできなかつた。近世近現代の仏足石の多くが、黒御影石あるいは御影石を使用しているのに対し、法然院のものは緑泥片岩(秩父青石)、安土城のものは安山岩が用いら



▼写真5・6 京都法然院佛足石



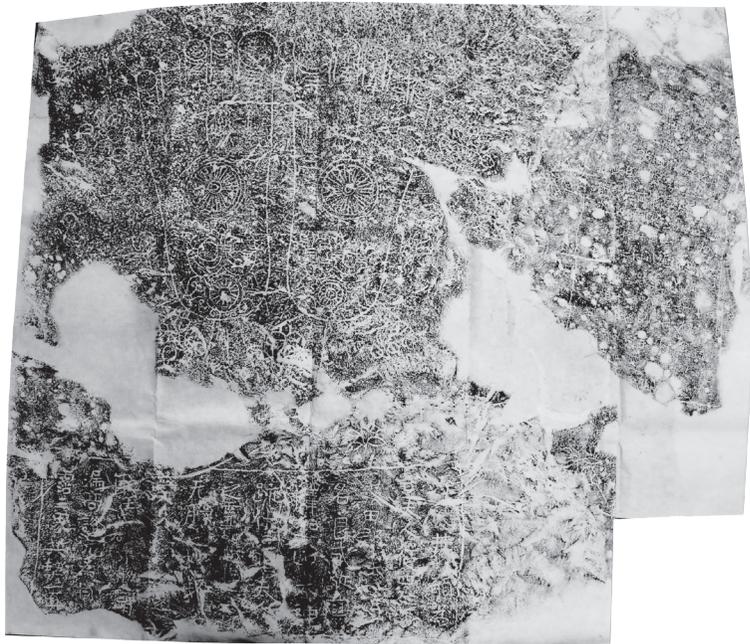
▼写真7・8 安土城佛足石

れている。国宝の薬師寺の仏足石は安山岩とみられるが定かなことは地質学の専門家の鑑定に待つほかない。三回にわたった一連の中世仏足石の調査では、薬師寺の国宝仏足石が古代にただ一つの存在で、長期断絶して近世に至って再び各地に出現するという不自然な残存状況について一定の見通しを持つことができた。中世にも確実に仏足石は存在していたこと、それが多くの場合無関心に屋外に放置されていたため風化が進み、それと認知されなくなったのではないかと考えられる。現存が確認される法然院、安土城、林昌寺三か所の中世の仏足石は、いずれも露天に放置され風化が進んでいる状況である。林昌寺のものは、三十年前に撮影された同寺の絵葉書には、より明瞭に仏足の文様が看取されわずか三十年で酸性雨の影響か、かなり風化が進んだことがわかる。また今回の調査では、根来寺にあるという仏足石を探したが、これは粉河寺の仏足石を誤って根来寺の仏足石としてネット上で公開したものが拡散したものと判明した。粉河寺での仏足石は参道入り口すぐの左側に覆いの屋根の下に柵に囲まれてすぐに見ることができた。しかしながら柵の周囲からかなり距

離があり、法量の計測はもちろんのこと、文字の判読すらかなわなかったのが残念であった。石質は安山岩様に見受けられたが判然としない。周囲の側面には一面に篆書とも行書とも判別しかねる変わった書体で文字が刻まれているがおそらく近世にかかる追刻であると思われる。仏足石の仏足そのものは、林昌寺のものと共通して切り欠き部も確認できるので中世のものである可能性は高いと思うが、改めて許可を得て詳細な調査が必要である。台石が焼けたような赤みを帯びている面があるので、天正年間に行われた織豊政権による紀州制圧戦の粉河寺焼亡と関係しているとすれば中世のものであるといえるが、現時点では断定することはできないので中世に遡る可能性があるとどうとどめたい。

六、結びにかえて

本研究は、武蔵野大学「しあわせ研究」の基金を受託し「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続してきた成果である。初期仏教の日本での展開の一形態として天平勝宝五(七五三)年の年紀を刻する国宝薬師寺佛足石を研究の基礎と位置づけ、その碑文の研究を中心として従来の先行研究を踏まえながら、新たな字句の翻刻と修正、またその意味するところを広く紹介するために新たに分かりやすく解釈した。また古代の薬師寺佛足石以外の佛足石については、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であったが、中世の佛足石が京都法然院、安土城、泉南市林昌寺の三か所で確認され、また中世の可能性が高い粉河寺のものも確認することができた。薬師寺佛足石の碑文についての本研究は、従来の研



▼写真9 薬師寺佛足石埵和本精拓全揚本(縦180cm、横206cm)の部分
〔佛足石上面(写真の左上部)・背面(下部)・左側面(右側部)〕

究蓄積を大きく前進させることに成功し研究史の上に確かな地歩を築いたといえよう。また中世佛足石の存在とその特徴の確認は、佛足石研究において、今後空白とみられていた中世佛足石の発見に資することができるようになった点で大きな成果といえるだろう。

三年間にわたり、薬師寺の国宝佛足石銘文の調査研究を行うことができたが、今回の研究は、埵和本精拓本の存在が欠かせない。探拓者であり、所蔵者である金木和子先生に深く感謝申し上げたい。また、奈良の薬師寺から特別許可を頂け、昨年度、閉門後の夜の大講堂内でじっくりと銘文を拝見しつつ調査させて頂けたことも望外の幸せであった。奈良時代にはどのような銘文が「書」として刻されていたか知りたいと考えて始めた研究だが、お蔭様でその書美をわかる範囲でなるべく忠実に再現することができた。今後も仏教を中心とした文化の研究を推し進めていきたいと考えている。

○本研究は、第一・三節を廣瀬、第四節を遠藤、第五節を漆原が執筆し、第二節を廣瀬・遠藤、第六節を漆原・廣瀬で共同執筆した。

○本研究は、武蔵野大学しあわせ研究所「平成31年度しあわせ研究費」採択による共同研究の成果である。

【註】

- (1) 田村圓澄「撰論宗の伝来」（速水侑『論集奈良仏教第一巻 奈良仏教の展開』、雄山閣、一九九四年）一二五頁を参照。
- (2) 四角で囲った箇所は空欄の意味である。
- (3) 石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」（『東洋文庫』一九六六年再版）三〇頁を参照。なおこの書物は一九三〇年の初版本もあるが、本稿では再版本を参照した。
- (4) 藤野道生「禅院寺考」（『史学雑誌』六六・九、一九五七年）四一頁を参照。
- (5) 原田憲二郎、森下恵介、池田富貴子『平城の聲—平城京出土瓦展—』（編集…奈良市埋蔵文化財研究センター、発行…奈良市教育委員会、二〇一〇年）二二頁を参照。奈良市埋蔵文化財研究センターのホームページにて公開。
<http://www.city.nara.lg.jp/www/contents/1227078972143/files/rakapdf>
- (6) 廣岡義隆「文室真人智努の生涯—天平—知識人の憂愁—」（『三重大学日本語学』二、一九九二年）四五頁を参照。
- (7) 「善き友人」の意で善知識ともいい、仏の教えを説き勧めて善導する指導者や、寺院や仏像の建立のために金品を布施する人物を指す。この箇所では施主と解するのが妥当であろう。

* 武蔵野大学教育学部

† 武蔵野大学文学部

‡ 武蔵野大学グローバル学部